

国際コンファランスを開催

▼一九八三年以来、日本銀行は、金融研究所において国内外の著名な経済学者や中央銀行関係者を招いた国際コンファランスを開催しています。三一回目を迎えた今年コンファランスは、「Monetary Policy from New Perspectives」(金融政策の新たな視野)をテーマとして、五月二十七日、二十八日に開催しました。



開会挨拶を行う植田和男総裁 (撮影：中島美沙)

▼植田和男総裁の開会挨拶、ブルッキングス研究所のドナルド・コーン氏による前川講演(金融研究所発足時(一九八二年)の前川春雄総裁の名を冠したスピーチ)、連邦準備制度理事会のフィリップ・ジェファソン副議長、欧州中央銀行

のフィリップ・レーン理事、氷見野良三副総裁による特別鼎談、プリンストン大学のマークス・ブルネルマイヤー教授による基調講演が行われました。このほか、中央銀行関係者による二つのパネル討論、著名な経済学者等による四つの研究発表が行われ、活発な議論が展開されました。詳細は、日本銀行金融研究所ホームページをご覧ください。



第二六回情報セキュリティ・シンポジウムをオンライン開催

▼金融研究所情報技術研究センター(CITECS)は、二月二十七日、「ポスト量子時代の暗号技術」をテーマとするシンポジウムを開催しました。

▼暗号分野では、大規模な量子コンピュータの実現によって、現在広く利用されている公開鍵暗号の安全性が脅かされることが懸念されており、新たなリスクへの対応が喫緊の課題となっています。こうしたリスクへの対応として、量子鍵配送を使用することや、現在の公開鍵暗号を耐量子計算機暗号へ置き換えることについて検討

が進められています。また、将来に向けて、量子コンピュータを活用した新たな暗号機能の研究も進められています。本シンポジウムでは量子コンピュータや、これらの研究について講演およびパネルディスカッションを行いました。



第五回南海地震金融対策連絡会議を開催(高知支店)

▼三月十二日、日本銀行高知支店および財務省四国財務局高知財務事務所の主催により、二八の県内所在金融機関および防災関係者に参加いただき、標記会合を二年ぶりに開催しました。

▼標記会合は、南海トラフ地震発生時に金融面の円滑化を図るよう相互に連携を強化すること等を目的に、二〇〇三年から継続的に開催しており、今回が二五回目となります。

▼今回の会合では、高知県南海トラフ地震対策課から最新の南海トラフ地震発生時の被災想定、高知支店から日本銀行の業務継続体制

等、高知財務事務所から各種金融措置等について、それぞれ説明した上で、参加者間で意見交換を行いました。

▼今後も、被災時における現金供給や各種金融措置等が円滑に行えるよう、引き続き関係者間で連携を深めてまいります。

▼本会合の議事は、高知支店のホームページをご覧ください。



「CBDDCフォーラム全体会合(第五回)」を開催(一月)

▼決済機構局では、中央銀行デジタル通貨(CBDC)に関する「パイロット実験」の一環として、本年一月に「CBDDCフォーラム全体会合(第五回)」をオンライン形式で開催し、リテール決済に関わる民間事業者の方々と意見交換しました。

▼会合では、昨年度フォーラムで議論した主な論点や、パイロット実験における高負荷試験の結果等について説明したほか、より幅広いテーマに関する双方向の議論を、解像度の高い形で継続的に行うべく、現在フォーラム内に設置している七つのワーキンググループを、三つのディスカッショングループに統合・再編

編集後記

■ 今号の「対談」では、中学時代に陸上部で中距離選手だった植田総裁が、箱根駅伝で3連覇中の青山学院大学の原監督とチームの組織力や強さの秘訣について語り合いました。

■ 「インタビュー」では、45歳で建築家としての扉を開き、自然素材を生かした作品が多くの人を魅了する江戸東京博物館の藤森照信館長にお話を伺いました。建築家といえば、曾禰達蔵をご存じでしょうか。辰野金吾と共に、唐津藩が設立した英学校「耐恒寮」で高橋是清に、工部大学校（現・東京大学工学部）でジョサイア・コンドルに学んだ人物です。辰野の代表作といえば、日銀本店本館や東京駅丸の内駅舎ですが、曾禰はコンドルと共に、三菱一号館をはじめ、丸の内に本格的なオフィス街をつくり上げました。北海道にも、辰野らが設計した日銀旧小樽支店（現・金融資料館）の近くに、曾禰らが設計した旧三井銀行小樽支店が現存しており、親友の2人が競い合うようにつくった名建築が、今も街のシンボルになっています。

■ 今号から、日銀職員が多く出向する金融経済教育推進機構（J-FLEC）の協力を得て、「くらし・きんゆう塾」の新コーナーを開設しました。こちらにもご期待ください。

（村國）

[アンケート募集中]

「にちぎん」に関するご意見・ご感想は、アンケートよりお寄せください。日本銀行のホームページからインターネットでもアンケートにご回答いただけます。



※本誌は、全国の日本銀行本支店および貨幣博物館、旧小樽支店金融資料館等でお配りしています。個人の方の定期購読、郵送はお取り扱いしておりませんのでご了承ください。なお、既刊号全文をPDFファイル形式で日本銀行ホームページ上に掲載していますのでご利用ください。（https://www.boj.or.jp/about/koho_nichigin/index.htm）

※本誌に掲載している内容は、必ずしも日本銀行の見解を反映しているものではありません。日本銀行の政策・業務運営に関する公式見解等については、日本銀行ホームページ（<https://www.boj.or.jp>）をご覧ください。

にちぎん 2026年夏号
編集・発行人 村國 聡
発行 日本銀行情報サービス局
〒103-8660
東京都中央区日本橋本石町2-1-1
☎03-3277-1947

デザイン 株式会社市川事務所
印刷 サンパートナーズ株式会社
禁無断転載

する旨を説明しました。
▼日本銀行は引き続き、民間事業者の技術や実務に関する知見を、CBDICに関する実証実験と制度設計の検討に活かしていきたいと考えています。

「ISOパネル（第10回）：ISO20022の利活用の広がりとそのポテンシャル」を開催（三月）

▼決済機構局は、金融サービス分野の国際標準化を検討する国際標準化機構（ISO）金融サービス専門委員会（TC68）の国内委員会

事務局を務めており、三月十八日に標記パネルディスカッションを開催しました。

▼ISO20022は、金融取引の情報を伝送する際に用いる電文フォーマットの規則等を定めた国際規格です。ISO20022電文を利用することで、事務処理の効率化や資金洗浄対策の高度化につながることを期待されています。

▼当日は、ISO20022電文の活用状況や、ISO20022規格の二〇二六年改訂のポイントを解説した上で、有識者とともに、ISO20022電文の利活用に関する現状と課題や、規格改訂に

伴う金融実務への将来的な影響を議論しました。

▼金融サービス分野の標準化に関心のある方は、日本銀行ホームページに活動内容や取り組みを掲載しておりますので、ご覧ください。



FIN/SUM2026について総裁挨拶等を実施（三月）

▼本年三月開催の金融イベント「FIN/SUM2026」（金融庁、日本経済新聞社主催）において、植田総裁は、新たな金融エコシステムが発展するも、中央銀行が

引き続き「信頼のアンカー」の役割を果たすため、「一般利用型のCBDICのパイロット実験や、「中央銀行マネー」をブロックチェーン上の幅広い決済に活用するためのサンドボックスプロジェクトを、日本銀行の取り組みとして進めていること等を挨拶の中で紹介しました。

▼このほか、本イベントにおいて、決済の未来と中央銀行の役割に関するパネル討論、ホールセール決済における新技術の活用に関するラウンドテーブルおよびパイロット実験における「APIサンドボックスプロジェクト」の成果の紹介などを実施しました。